

氏名 徐 萍

本論文は、『平家物語』『太平記』等の軍記物語における漢籍を典拠とする政治思想について、中国から日本への変容を明らかにしつつ、それが各作品の中でどう位置付けられているかを考察したものである。序章・終章のほか、本論を三部十一章に分けて構成している。

第一部は延慶本『平家物語』における政治思想を、「天」という概念を中心に論じる。第一章は安徳天皇入水直後に記される「安徳天皇後日譚」につき、日本的に変容された「天人相関思想」が背景にあることを指摘する。第二章で董仲舒の「天人相関思想」を孟子の「天命思想」等と比較しつつ中国における思想史の中で位置づけた上で、第三章では延慶本『平家物語』の「天」の語義を分析して、それが一義的に決定できず、作品の中で多様な機能を担っていることを明らかにする。

第二部は『太平記』における政治思想を、巻四「呉越戦の事」を中心に論じる。第五章は同章段の「会稽の戦」の故事の引用につき、『史記』などの漢籍とは異なって受容された日本における「会稽の恥（会稽の戦）」の用法に基づき、『太平記』の叙述にふさわしく改変されていることを指摘する。それは後醍醐天皇を好意的に描こうとする『太平記』の意図に基づくものであるとし、第五章では、「呉越戦の事」の君臣の関係を分析することによってそれを補強する。第六章は「呉越戦の事」中の西施説話を扱い、これが勾踐との恩愛物語として造型された経緯を解明する。

第三部は日中両国における『貞観政要』の受容を論じる。第七章は延慶本『平家物語』に記載された「船と水」「魚水の契」「船と棹」の三種の君臣関係の比喻が、『貞観政要』を受容しつつ、後白河院をめぐる政治状況に即して変容しているさまを分析する。第八章は君を船に、民を水にたとえる『荀子』の文言の日本における受容史をたどり、第九章は『三国志』蜀志に見える「魚水（の契り）」の語の日本の変容の軌跡を追跡する。第十章は帝王学の書『貞観政要』の唐王朝における享受を記録をもとにたどり、政治的にはあまり機能していなかったことを明らかにし、第十一章は『貞観政要』の日本における享受を端的に表す文献『仮名貞観政要』に注目して、著者菅原為長が翻訳に際し省略・増補・意識などを行いつつ、適宜日本的受容を図ったことを実証する。

本論文は、『平家物語』『太平記』等に見られる、中国由来の政治思想を表す語句に注目し、これを、中国・日本双方の文献を博捜しつつ、それぞれの思想史的課題をふまえた上で、作品の中での意味を分析したものである。軍記物語の作品理解にさらに考察を深める余地があるなど、今後の課題も存するが、本審査委員会は本論文に上記のような研究史的意義を認め、博士（文学）の学位に十分値するとの結論に至った。